

説教 『御自分の事とされるイエス』 山本 護牧師  
聖書 イザヤ書 53:10/ルカによる福音書 7:11~17

人と人が死によって分かたがれる「感じ」。それはどのようなものか。私の父母の葬送儀礼を思い起こす。火葬後、熱気が残る骨に直面した時、「ああ、離れてしまったのだな」と、じわり感じた。

イエスが葬列に遭遇したナインの町では、町の門が死を受容させる境界でもあった。「イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出される場所だった(ルカ 7:12)」。母はやもめで(7:12)、女手一つで息子を育てたこれまでの辛苦と、これからの悲嘆が予感される。

イエスは母を見て、「もう泣かなくともよい(7:13)」と言った。想像を拡げれば、付き添う大勢(7:12)の中に泣き女も数名いて身ぶり大きく嘆いている。イエスは母にだけでなく、泣き女にも、悼む者全員に「泣くな」と命じたのではないか。つまり泣きに泣いて、死を受容する作法を中断させた。

イエスは死んだ息子を生き返らせる(7:15)。ただ他の聖書箇所のように(ルカ 8:41, マテ 11:3)、懇願されて生き返らせたわけではない。そもそも母は、悲しみと苦痛に沈んで祈りを失い、イエスのことなどまるで見ていない。「主はこの母親を見て、憐れに思った(ルカ 7:13)」。「憐れに思い」という表現は「主」であるイエスだけに用いられる特異な言葉で、直訳すれば「腸(ハラワタ)がちぎれる感情」といった意味。イエスは母の心をそのまま自らのものとされた。祈れず願えずであっても、イエスの方から悲しみや貧しさに感応して母の心となった。そして「近づいて棺に手を触れられた(7:14)」。埋葬前の棺の蓋は釘で打ちつけられておらず、息子の死に直接触れた。つまり彼の死をも御自分のものとされたのだ。

死を前にして、遺された者はその事実を何とか受容したい。私は火葬後の骨で納得し、ナインの町では棺を門の外に運んで生者と訣別させた。死の現実には圧倒的で、受け入れるより仕方がない。しかしイエスは、そんな死に対してさえ命への転換を命じ(7:14)、生き返った息子をその母に返した(7:15)。

この出来事の直後、洗礼者ヨハネは弟子を遣わして「来るべき方は、あなたででしょうか(7:20)」と尋ねた。イエスはこう答えた。「行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、らい病をわずらっている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている(7:22)」。すなわち、息子が生き返り、母が奇跡の慰めを得たことは、世の救いが開闢される大きな変化のひとつ。とはいえイエスにとっては、一つひとつが命を賭した行為。「腸がちぎれる感情(7:13)」で私たちに触れ、それを御自分の事となさる。

だから私たちは、今の自分を丁寧に自覚したい。私の命は隅々までキリストと共にある。苦痛や不安の時には、傍らで私以上に「腸がちぎれて」おられる。私が旅をする時には、野の花となるよう導いて下さる(12:27)。そして死の時には、私の死に手を触れ(7:14)、復活の福音を与え給う(7:15,22)。

「病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ、彼は自らを償いの献げ物とした(イザヤ 53:10)」。「主(ルカ 7:13)」の「腸がちぎれる思い」は十字架に由来する。御自ら償いの献げ物となり、私たちの新たな命となられた(7:22)。すなわち「主の望まれることは、彼の手によって成し遂げられる(イザヤ 53:10)」。



#### 【おまけのひとつ】

福音は貧しい者に告げ知らされている(ルカ 7:22)。自分の能力や感性、自分の財産に頼る者には知らされないのか。然り、貧しい者の能力や僅かの財産は、世俗任せにせず、キリスト任せにされる。